

「常盤寄席」100回超え

荒船寄席で落語を披露する林家染太さん=大阪市北区天満で



夕日が傾き、辺りが

松山市出身の林家さ

暗くなりかけるころ、
んは中学生のときに初
大阪中心部のビル街か
ら太鼓や三味線の音色
が漏れてくる。大阪・
天満のビルの5階で、
月に1回、落語が聞け
る「常盤寄席」。20
05年から毎月欠かさ
ず、開催は100回を超えた。

先輩が、芸を磨く場として常盤寄席を提供してくれた。

「月に1回必ずやろう」と決意して9年。
「今日のお客さんは、林家さんにとって夜中良い反応だったね」。6月下旬、約一時間半の公演を終えて、落語家の林家染太さん(38)所だ。「本当にネタが満足そうな表情を浮かべ、額の汗をぬぐつた。観客は声を出して笑った。30人ほど入る小さな部屋は中高年だけではなく、親子連れもいてほほ満席。うどんを題材に話す林家さんが、ずっと舞やつゆをすする音を大きく響かせた。観客は声を出して笑った。

夕日が傾き、辺りが暗くなりかけるころ、なんは中学生のときに初めて落語を見て感銘を受けた。大阪の大学を卒業後に弟子入りし、偶然知り合った同郷の先輩が、芸を磨く場として常盤寄席を提供してくれた。

「月に1回必ずやろう」と決意して9年。林家さんは、一人で練習したり、ネタおろしをしたりする「道場」のような場所だ。「本当にネタが満足そうな表情を浮かべ、額の汗をぬぐつた。観客は声を出して笑った。30人ほど入る小さな部屋は中高年だけではなく、親子連れもいてほほ満席。うどんを題材に話す林家さんが、ずっと舞やつゆをすする音を大きくながらかべ、額の汗をぬぐつた。観客は声を出して笑った。

松山市出身の林家さんは、中学生のときに初めて落語を見て感銘を受けた。大阪の大学を卒業後に弟子入りし、偶然知り合った同郷の先輩が、芸を磨く場として常盤寄席を提供してくれた。

6月の公演では、普段は袖から聞こえる三味線や太鼓を、客の前で演奏して見せた。この音は彼を表現しています」「幽霊が出てくることはこんな感じです」。小さな寄席だからこそできる演出に観客は身を乗り出して手を拍打した。

「狭いけど臨場感が楽しい。やっぱり寄席が楽しい。やっぱり寄席が楽しい」と。終了後、興奮しながら身を乗り出して手を拍打して、林家さんはしみじみと言った。「同じ話でもうまくいくこともあります」。林家さんは、「一期一会だと思えるのが、寄席の良いところなんです」。

30人ほど入る小さな部屋は中高年だけではなく、親子連れもいてほほ満席。うどんを題材に話す林家さんが、ずっと舞やつゆをすする音を大きくながらかべ、額の汗をぬぐつた。観客は声を出して笑った。

寄席 落語を中心とした大衆演芸を客に見せるための興行場。一年中落語を楽しめる寄席を定期的に行なうといい、東京の錦本演芸場(上野)や末広亭(新宿)がある。大阪の寄席は戦後、経営難からすべて閉鎖されたが、2006年9月、個人や企業の寄付金により、約60年ぶりに定麻の天満天神繁昌亭が設立され、観客は声を出して笑った。

大阪・天満開催で催月1回林家染太さん「臨場感ある一期一会」

このお客様、結構ジニアなんですよ」

人気が低迷していた上方落語は、06年9月、大阪天満宮の近くに

「天満天神繁昌亭」ができる再び盛り上がりを見せる。

林家さんも今は繁昌亭での公演がメイン。それに比べ、常盤寄席は客も少なくちづからない。でも、今後も大切にする原点だという。

6月の公演では、普段は袖から聞こえる三味線や太鼓を、客の前で演奏して見せた。この音は彼を表現しているとおもいます

「幽霊が出てくことはこんな感じです」。小さな寄席だからこそできる演出に観客は身を乗り出して手を拍打した。

「狭いけど臨場感が楽しい。やっぱり寄席が楽しい」と。終了後、興奮しながら身を乗り出して手を拍打して、林家さんはしみじみと言った。「同じ話でもうまくいくことがあります」。林家さんは、「一期一会だと思えるのが、寄席の良いところなんです」。